

## 1 水稻生育状況 中苗:ななつぼし

### ●生育状況調査 (8月1日現在)

区分	草丈 (cm)	葉数 (葉)	茎数 (本/㎡)	遅速 日数	備考 ※ ( )は平年比
R5年	90.2	10.5	490	早7日	出穂期7/24 (早5日) 出穂揃7/29 (早7日)
平年値	87.0	10.8	536		
差	-3.2	-0.3	-46		

- (1) 生育状況について  
生育の遅速は、平年より早い。
- (2) 土壌水分の確保  
開花後、登熟初期(開花～20日間)は、籾の中で子房が急速に大きくなるため、水分が必要である。ほ場にひび割れ(=断根)が発生しないように土壌水分を確保すること。  
※常時滞水させる必要なし。一時的に滞水、落水を繰り返す。  
なお、登熟初中期に高温(最高29℃、最低23℃以上)が5日以上続くと予想された場合は、かんがい水の掛け流しを行い、水田地温を下げて乳白・腹白粒などの発生を防ぐ。  
但し小雨が続く場合は掛け流しは行わず湛水状態を維持する。
- (3) 病虫害防除対応  
計画的に基幹防除を実施するとともに、病虫害発生状況を確認し、必要に応じて追加防除を実施する。
- (4) 落水時期と落水後の水管理  
落水の目安は「穂かがみ期(出穂25日後頃)」以降。水田が乾燥する場合は走り水を行い、土壌水分を確保に務めること。

## 2 主要野菜の生育状況

作物名	生育状況	技術対策
トマト	3月定植：7～8段目収穫 4月定植：7段目収穫 5月定植：3～4段目収穫 6月定植：1～2段目収穫。 <病虫害・障害> ・灰色かび病、すすかび病、アザミウマ類、黄変果、軟果、尻腐れ果の発生が見られる。	・ベット内側の葉や老化葉を中心に摘葉を行い風通しを良くする。 ・遮光資材の利用、ハウスの開閉、換気で、黄変果の発生を防ぐ。 ・適切な土壌水分確保や肥培管理に努める。 ・ハウス内外の雑草を除去する。 ・害虫は定期的に防除を行う。 アザミウマ類はピレスロイド系薬剤の連用を避ける。
ハク軟白ねぎ	・4月定植収穫中。 ・ハモグリバエ類が見られる。	・ハウス内外の雑草除去、収穫残渣の処分を徹底する。 ・害虫は定期的に防除を行う。 ・べと病の防除を行う。

作物名	生育状況	技術対策
アスパラガス (ハウス立茎)	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏芽収穫中。</li> <li>斑点病の発生が見られる。</li> <li>一部ほ場でジュウシホシクビナガハムシの発生が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>斑点病の定期的防除に努める。</li> <li>ハウス内外の除草を行う。</li> </ul>
かぼちゃ	<ul style="list-style-type: none"> <li>1番果収穫始。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>黒斑病、うどんこ病の防除を行う。</li> </ul>

### 3 畑 作

○ばれいしょ

**疫 病**：全道的に発生量がやや多い傾向。罹病茎葉で作られた胞子が塊茎感染のもとになる。**収穫まで塊茎腐敗に効果のある薬剤で防除を徹底**し塊茎腐敗の発生を防ぐこと。

**軟腐病**：高温多湿で多発しやすい状況であり、地域でも既発している。防除の徹底を心がける。

○小 豆 本年の開花は例年より進んでいる。菌核病・灰色かび病は開花後に発生しやすくなり、開花始7～10日後が1回目の防除の目安になる。ほ場をよく観察すること。

病害虫名	防除時期
灰色かび病・菌核病	1回目：開花始7～10日後 2回目：1回目防除から7～10日後
アズキノメイガ	8月上旬～中旬

○大 豆 生育は例年より進んでいる。マメシンクイガの防除開始が遅れないように。

1回目：若莢がついた頃（8月5～8日頃）ほ場を良く確認！
2回目：1回目の散布から7～10日後

※連作畑や前年発生が多いほ場では要注意！

○小麦後作緑肥の導入

小麦収穫跡地の緑肥作物は、地力維持・土壌病害の発生軽減・土壌浸食防止など効果がある。生育確保のためできるだけ早くは種する。

### 4. 飼料作物生育状況（8月1日現在）

作物名	生育状況				生育期節	適 要
	項目	R5年	平年	遅速日数	絹糸抽出期 (平年値)	
牧草(2番)	草丈(cm)	48.9	52.2	-2		生育は平年並である。
飼料用とうもろこし	草丈(cm) 葉数(葉)	327.0cm 19.1葉	255.3cm 16.5葉	+7	7/27 (8/3)	生育は平年より早くすすんでいる

#### ●2番草の収穫調製と保管

- ①ロールベールに調製する場合は、調製後の乾草等を草地に放置せず、速やかにほ場から搬出する。
- ②乾燥が不十分なまま梱包した乾草は、自然発火の恐れがあるため、ベール中心温度が30℃以下になり、異臭がないことを確認してから乾草舎等に収納すること。
- ③草地更新する場合は、なるべく8月末までには種できる段取りを進める。